

# あじえんだ

2009.11  
第23号

■協議会事業の紹介

## 田んぼの生きもの調査経過報告 上下流交流事業(横浜市)

■寄稿

酒造りを通じて伝えたい「田んぼの多面的な価値」  
釣り人の手で桂川をきれいに「桂川クリーン大作戦」  
平成の名水100選「夏狩湧水を使ったわさびづくり」

■連載

馬入水辺の楽校へようこそ！  
悪玉生物といわれても・・・  
エコへの一歩  
地域協議会だより(桂川・東部地域協議会)  
流域ウォッチング20「流域の伝説・民話」



# 2009年度 上下流交流事業を開催しました！

上下流交流事業は、例年、水に関する施設や良質な水環境が守られている地域を訪ね、学習会などに楽しいイベントを加える形で開催しています（会員以外の方も参加できます）。

さて、今年2009年は、横浜開港150周年に当たります。また、横浜市は、流域から若干離れてはいますが、桂川・相模川の利水地域となっており、上流と大変縁の深い地域でもあります。

このような節目の年に、日本で最初の近代水道として給水を開始した横浜市の水道の歴史を知ることは意義のあることと考え、当地においてこの事業を開催しました。



■開催日時：8月11日(火) 9:30～16:00

■場所：横浜水道記念館・西谷浄水場・海事広報艇「はまどり」

■参加者：61名

## ○横浜水道記念館・西谷浄水場見学

開催日である8月11日は、台風9号と早朝に駿河湾で発生した地震（これで飛び起きた人も多いのでは？）に見舞われ、事業の実施が一時危ぶまれましたが、天候、交通網とも徐々に回復し、無事に実施することができました。

開港とともに、国際交流の場として注目を浴びようになった横浜ですが、海を埋め立てて街がつくられたため、井戸を掘っても水が塩辛く、飲み水にならなかったと言われています。このため、神奈川県知事からの依頼により、英国人技師H.Sパーマー氏が横浜に適した水源を調査し、2年6ヶ月かけて工事を行い、明治20年日本で初めての近代水道を完成させました。最初の見学場所である横浜水道記念館は、横浜水道創設百周年を記念して、昭和62年に開設された施設です。記念館では、ひしゃく一杯の水が貴重な時代から、日本で初めての近代水道の創設、そして現在に至るまでの歴史を資料・映像展示等で紹介しています。職員の方の説明を受けながら、ビデオや展示物を見学し、横浜の水道の歴史について勉強しました。



横浜水道記念館見学の様子

その後、記念館と隣接している西谷浄水場を見学しました。この浄水場は、相模湖や道志川を水源としており、現在の浄水能力は1日当たり356,000m<sup>3</sup>（横浜スタジアム約1.1杯分）となっています。浄水処理された水は、主に鶴見、神奈川、西、中、南、保土ヶ谷各区方面に給水されます。また、大正4年に築造されたる過池整水室上屋4棟、配水池配水井上屋1棟が、平成9年6月に登録有形文化財に指定されており、建物そのものにも大変価値がある場所です。



西谷浄水場。まずは屋内で浄水処理工程や「はまっ子どうし」の説明を受けました。

浄水場では、「はまっ子どうし」と、水道水の浄化の工程について説明を受けました。「はまっ子どうし」は、水道水源の良さを市民の皆さんに知っていただくため、水源である道志の水をボトルングしたものです。横浜市のオフィシャルウォーターとして市内では広く販売されているため、飲んだことがある方も多いかと思います。はまっ子どうしの売上金の一部は、道志村の水源林を守る市民ボランティアの活動に活用され、500mlのボトル1本を飲むと、15cm四方の森林が保護されることになるそうです（2004年～2006年実績）。

余談ではありますが「はまっ子どうし」の美味しさに着目した企業があります。地ビール製造のサンクトガーレン（厚木市）は、「はまっ子どうし」の水を使用して開港当時

のビールを再現した「YOKOHAMA XPA (エクストラ ペール エール)」を2008年6月11日より発売しました。これは仕込みに「はまっ子どうし」を使用し、ペリー提督が日本に持ち込んだとされる上面発酵のビール「ペールエール」を再現したものです。ビールの約9割は水であり、どんな水を使ってビールを造るかはビール造りの大切な要素となります。美味しいビールを造るには、濁度0.0000という驚異の透明度をもつ「はまっ子どうし」は最適だそうです。

参加者からは、「横浜市は、道志川だけでなく、相模湖からより恩恵を受けていることを意識し、強調してもらいたい」「はまっ子どうしのポトリングは県内でできないのか」といった質問や意見が活発に出されました。

説明後、実際に場内の施設を見学し、水道水がきれいになっていく過程を実際に目にすることができました。また、場内には出来たての水を飲める水飲み場がありました。ここは蛇口をひねってそのまま水を飲むことができるため、蛇口から直接水を飲むことの少なくなった子どもたちにとっては、新鮮な光景かもしれません。ペットボトルに入った水を買う人も増えてきましたが、おいしい水道水があることも、多くの子どもたちに知ってもらいたいと思いました。

山梨県・神奈川県という枠を超え、上下流一体で流域環境の保全について考える協議会としては、両県を水源とする施設の見学や意見交換が出来ることは有意義であったと思います。



実際に水がきれいになっていくのが、目に見えてわかり、驚きました。

#### ○海事広報艇「はまどり」への乗船体験

午後からは、横浜市の海事広報艇「はまどり」への乗船体験を実施しました。

この船は、平成元年に横浜市政100周年・開港130周年を記念して建造され、(1) 青少年への海洋海事思想の普及と市民の港湾への理解を深めること、(2) 内外からの訪問者、港湾関係者に港湾の振興宣伝を図ることを主目的に運航しています。

午前中とは打って変わって晴天の中、横浜港ガイドの説明を受けながら、横浜港内を1時間ほど見学しました。船の中は思ったよりもゆったりとしており、外装だけでは

なく内装も立派な船でした。横浜港の振興宣伝のためとはいえ、これで乗船料が無料であるとは驚きです。甲板に出ることもでき、横浜港の海風を感じることができました。

「はまどり」という名前は、横浜の「はま」と未来にはばたく子どもたちの姿をイメージして命名されたそうですが、実際に青少年を中心に多くの方が乗船し、特に小学生の社会見学として人気があると伺っています。平成20年3月には就航以来、乗船者数が40万人を達成し、運航距離数は約116,291kmで、なんと19年間で赤道付近の地球の円周を約3周した計算になるそうです。



【運航コース：(社)横浜港振興協会HPより抜粋】



はまどりは結構大きい船でした！

#### ○終わりに

利水地域の横浜での上下流交流事業の実施は、今までの流域内での事業とは一味違ったものになったと感じています。参加された方々から「浄水場では水がきれいになっていく過程が分かり、勉強になった」「船の乗船体験は大変興味深かった」等の感想をいただき、充実した事業になったのではないかと考えています。

# 田んぼの生きもの調査報告

報告者 倉橋満知子

田んぼの生きもの調査は、昨年度(20年度)の学習会や現場実習を経て、今年度(21年度)は桂川・相模川の流域各地域に範囲を拡大して、調査を始めています。上流山梨側は大月市4箇所(6枚)、下流神奈川側は相模原市2箇所(3枚)、座間市1箇所(1枚)、海老名市1箇所(2枚)、愛川町1箇所(5枚)、厚木市1箇所(4枚)、合計21枚の田んぼを田植え後1、2週間後、田植え後40日後、出穂前、止水前の4回調査を行います。7月までに2回の調査を実施しました。以下は各地の調査内容です。

## ■山梨県大月市

大月市は町全体が山間のため平地が少なく、田んぼも少なく、小さいものが多い。そのなかで、4箇所を耕作者さんの協力を得て調査しました。田んぼの周囲の環境がよく、水も沢水などを利用しているのきれいだ、水路が全てコンクリート三面張りでも流れも速い。生物層としてゲンゴロウの幼虫ととんぼの成虫が多いのが特徴。



(猿橋町藤崎地区)



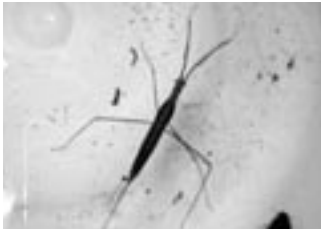
シマゲンゴロウ

○藤崎地区：国道20号線猿橋から山間深く入った沢水を利用し、今年から無農薬に転換した鈴木さんの二枚の田んぼ。眼下に桂川を見下ろす山のなかの開けた地域。ここで神奈川ではほとんど見られなくなった、シマゲンゴロウを一番に捕獲、さすが山梨、生物環境が豊かと喜ぶ。

○大月市内：大月駅に近い国道20号線から70mほど入った可愛いと言ったほうが似合う河西さんのグループが今年から始めた一枚。農薬使用、化学肥料、と通常のやり方。水は農業用水、生活雑排水が流入。

○真木(上流部)地区：真木川の真木温泉から上流に上った標高1000mにある小林さんの無農薬の二枚の田んぼ。環境、水は良好だが生物層が少ない。トンボの数が多い。

○真木(中流部)地区：富士山を正面に見る、景観が美しい清水さんの減農薬、化学肥料の一枚。ここでもシマゲンゴロウを捕獲。比較的生物層が多い。



ミズカマキリ



ホソミオツネイトンボ

◇主に見られた生きもの

シマゲンゴロウ、コシマゲンゴロウ、チビゲンゴロウ、ゲンゴロウの幼虫、モノアライガイ、カゲロウの幼虫、ミヤマアカネ、ナツアカネ、ミズカマキリ、ホソミオツネイトンボ

## ■神奈川県厚木市(東京農業大学実習田)

厚木市棚沢地区にある東京農大の2.9ヘクタールの実習田。厚木市が大学との連携を考慮し、大学側に足を運んで、昆虫クラブの学生と協力できるよう手配してくれた。冬水田んぼ二枚(無農薬、不耕起、手植え)、通常耕作二枚の合計4枚の田んぼを調査。水は中津川の農業用水、水路はコンクリート三面張り。冬水田んぼは生物層が多い。普通田は種の数が多い。



東京農大(学生と一緒に)



ナツアカネのヤゴ



コオイムシ

## ■神奈川県座間市(座間新田)

相模川左岸の河原に沿って広がる田んぼの中の、今年から農業を始めた片山さんの一枚。無農薬、有機栽培を目指しているが、隣から農薬使用の水が流れ込んでいる。水は相模川左岸用水、水路はコンクリート三面張り。生物層は比較的豊かで、あまり見られなくなってきているハウネンエビを捕獲。近くの農家のおじさんに「家の田んぼに沢山いるよ」と声をかけられた。



座間新田



ハウネンエビ



ドジョウ



◇主に見られた生きもの

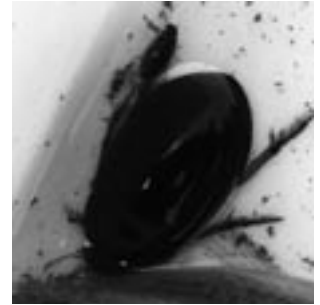
丸タニシ、ヒラマキミズマイマイ、カイミジンコ、ホウネンエビ、ユスリカ、トウキョウダルマガエル、ドジョウ

## ■神奈川県海老名市(泉橋酒造田)

昨年度、研修田として行った、相模川左岸用水、酒米冬水田んぼ二年目(無農薬、不耕起、機械植え)の二枚。水路は三面コンクリート張り、鳩川の水田地帯で、山から離れているが生物層が豊か。泉橋酒造が今年から全面冬水田んぼに転換して、無農薬酒米の酒造りに挑戦している(6ページ記事を参照)。



泉橋酒造田んぼ



ガムシ

◇主に見られた生きもの

ドジョウ、トゲバゴマフガムシ、キロヒラタガムシ、タマガムシ、モートンイトトンボ、チビゲンゴロウ、オタマジャクシ、ホウネンエビ

## ■神奈川県愛川町(尾山耕地)

昨年度、研修田として行った、中津川の右岸、尾山の麓に広がる水田の内5枚(無農薬、減農薬、農薬使用、土畦、コンクリート畦)。中津川農業用水、水路は三面コンクリート張り。人家がなく、川と山に挟まれている環境も要素と考えられるが生物層が豊か。絶滅危惧種も多い。



尾山耕地



シマヘビ



トウキョウダルマガエル

◇主に見られた生きもの

コオイムシ、モートンイトトンボ、シマヘビ、アカハライモリ幼生、マルミズムシ、トウキョウダルマガエル、ドジョウ、オタマジャクシ、イチョウウキゴケ

## ■神奈川県相模原市(鳩川・縄文の谷戸)

市街地の住宅に囲まれた場所で、鳩川の段丘崖からの湧水を利用し、冬水田んぼ(無農薬、有機肥料、不耕起、手植え)五年目の鳩川・縄文の谷戸の会の二枚の田んぼ。斜面林と鳩川に挟まれた湿田のため、耕作地としては不利な条件だが、生きものにとっては別天地である。水路は全て土だが、鳩川との連絡が不完全なため、川からの行き来ができていない。アメリカザリガニが多いのが難点で、調査初期は生物層が多かったがその後少なくなった。イチョウウキゴケが水面を覆っている。



鳩川・縄文の谷戸



ヒメイトアメンボ



イチョウウキゴケ

◇主に見られた生きもの

イチョウウキゴケ、コムズムシ、アメリカザリガニ、アジアイトトンボ、サカマキガイ、チビゲンゴロウ、モノアライガイ、マツモムシ

# 馬入水辺の楽校へ ようこそ！



## 2. ひつつき虫で遊ぼう

浜口 哲一(馬入水辺の楽校の会)

### 原っぱのひつつき虫

馬入水辺の楽校には、広々とした原っぱがあります。多目的に使うために、草丈を常に低く維持している場所もありますし、バッタなどの虫が暮らしやすいように草刈の回数を減らし、膝丈くらいの草むらにしている場所もあります。

草丈の高い方の原っぱでは、秋になると、ハギに似た美しい花をつけるマメ科の植物が群生するようになります。帰化植物であることが残念なのですが、北米原産のアレチヌスビトハギという種類です。秋が深まってくると熟すアレチヌスビトハギの実は、平べったいブラジャー型をしているのですが、草の中を歩くとズボンについて大変なことになります。服に付く実、いわゆる「ひつつき虫」なのです。どんな仕組みで服につくのか、虫眼鏡でのぞいてみるのも面白いでしょう。

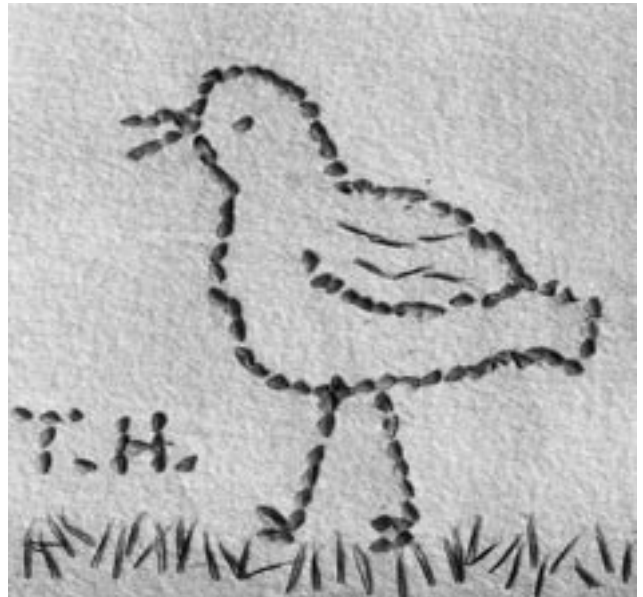


アレチヌスビトハギの花と実

### ひつつき虫で遊ぶ

さて、このひつつき虫では、いろいろな遊びをすることができます。たとえば、チャンバラはどうでしょうか。選手は、それぞれ熟した実のついた枝を1本ずつ持ち、逃げる相手の背中にその枝を使って切りつけるのです。体に枝があたると、実が服につくのですぐに分かります。一つも実がつかなかった人が勝ちというように、ルールを決めて遊ぶとよいでしょう。誰でも鬼ごっこのような遊びは楽しいもの、夢中になることは間違いありません。

活発に走り回る遊びをした後は、落ち着いた遊びを試みましょう。フェルトなどの布を用意し、ひつつき虫で模様を作っていくのです。平塚市博物館では、こうした作品を「ひつつき虫のタペストリー」と名付けています。



ひつつき虫のタペストリー

このように、アレチヌスビトハギという1種類の植物があるだけで、いろいろな観察をすることもできますし、それを材料にしていろいろな遊びを考え出すこともできます。水辺の楽校は、そうした多様な自然とのふれあいを作り出していくフィールドを目指しているのです。

(馬入水辺の楽校へは、平塚駅北口から神奈中バス茅ヶ崎行き(9番線)「馬入橋」下車徒歩15分 または東八幡工業団地行き(9番線)「馬入ふれあい公園入り口」下車徒歩10分。シーズンによっては、同じく9番線から馬入ふれあい公園行き臨時シャトルバスあり。終点下車徒歩5分。)

# 酒造りを通じて 田んぼの多面的な価値を皆さまに

泉橋酒造株式会社 代表取締役 橋場友一

私の家は江戸の終わり、安政四年(1857年)から続く造り酒屋で、私で六代目になります。15年前に家業の造り酒屋に戻ったとき、酒屋が他所から買った米で酒造りをするに疑問を持ちましたが、平成7年に米の流通に関する法律が改正されたのを機に、自社での酒米作りを始めました。

私の家は自家用米を作っていましたので、場所があり、米作りの知識と経験があったことを背景に、今までの販売方法や商品を見直して変えてゆかなければという危機感、そして何よりも、米作りからの酒造りこそがこれから目指すべき道だという強い思いからのスタートでした。



また、量を確保するために一緒に米を作ってくれる地元農家を探し、「相模酒米研究会」を立ち上げました。酒米は背丈が高く、育てるには特別なノウハウが要ります。米作りのプロとはいっても、皆酒米は初めてでしたので様々な苦労がありました。農協や農業技術センターの力もお借りして、栽培の勉強会を定期的に行っています。平成21年現在で、20町歩の生産までになり、蔵で使う米のほとんどが地元米でまかなえるようになりました。

酒造りは秋に始まり、四月桜の咲くころに終わります。今までは杜氏をリーダーとした出稼ぎの蔵人たちが酒を造っていました。彼らは冬場農作業のない時期の仕事として、酒造り技術を身につけ酒屋へ出向いていたわけです。

しかし、農業の跡継ぎが居なくなるとともに酒造りの出稼ぎの跡継ぎも減り、代わって今の中心となる造り手は酒造りに魅力を感じ、職業としていわゆる「就職」する人たちです。現在、三人の社員が夏場は営業と農業、冬場は酒造りという年間通じての仕事をしています。そもそも酒を造る当人たちが米を知ることが当然のことであるはず。田んぼの見回りを日課とし、除草剤を使わないでひたすら草取りをする日々の中で、自然と田んぼの生き物に愛着がわき、米を作るために安易に農薬を使うことに対する危機感を

肌で感じたようです。もちろんお酒は口にする飲料ですから、農薬を減らした健全な米を使うことはいままでもない基本です。



いづみ橋ではシンボルマークに赤トンボを使っています。赤トンボは田んぼで生まれ育つ生き物なので、農薬を減らせば単純にその生息数が増えていきます。秋の空に沢山の赤とんぼが飛び交う、そんな町を作りたいという思いを込めた蔵からのメッセージなのです。実際にここ数年、感覚としてですが様々な生き物が増えているような感じがします。また、今年の流域協議会の田んぼの生きもの調査の際に、珍しい「モートン糸トンボ」が生息していると確認されました。

酒のラベルにも「トンボ」と「ヤゴ」をデザインしたものを作り、多くの人に興味を持ってもらえるように考えています。顧客へのDMに稲の生長が分かる写真や、ヤゴの写真を入れたりすると、買い物に来て田んぼに立ち寄りていくお客様もいらっしやいますし、一般消費者を募る稲刈りのイベントは、人数制限するほどの人気です。普段接点がないからこそ、余計にノスタルジックな想いをかきたてるのかもしれない。そこに上手に訴えかけたいと思っています。また、酒販店でも店先にバケツ苗をおいて宣伝に利用したり、田植え、稲刈りに参加して体験するなど、もはや農業抜きにはいづみ橋の酒は語れなくなっています。

酒造りは工業ではなく、どちらかといえば農業、酒はいわば農産物加工品です。原材料の確保という意味だけではなく、お酒を通じて、田んぼの多面的な存在価値を広く知らしめたいと思っています。

泉橋酒造株式会社 神奈川県海老名市下今泉 5-5-1  
<http://www.izumibashi.com>



# 流域の伝説・民話

桂川・相模川流域には、その地域の昔を伝える伝説や民話が数多くあります。

伝説や民話は、架空の話と言うにとどまらず、その地域の自然や歴史、住んでいる人々の姿を凝縮して伝える内容を持つものもあるのではないのでしょうか。いずれの話も読んでみると力強さのようなものを感じるものです。ほかにもたくさんのお話等があるのですが、少しばかりご紹介します。お楽しみください。

なお、今回は、会員の皆さんに広く伝説等をお知らせくださるよう募集をいたしました。ご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。

## ①およしが池伝説 (大月市)

700年前の昔、親鸞聖人が甲州路に足を踏み入れたときのこと。笹子川のほとり、吉が久保に「およし」という女性が住んでいました。およしは働き者でよい女房でしたが、夫の浮気を嫉妬して哀れにも池に身を投げてしまいました。そして、口惜しさのあまり死んでもなお成仏できず、毒蛇となって村人を悩まし続けるようになりました。これを聞いた聖人は吉が久保に行き、付近の小石を拾って『南無阿弥陀仏』と書き、念仏をとえ池に投げ入れました。すると毒蛇はもとのおよしの姿に戻り、成仏したのです。村には再び平和な日々が戻りました。およしの父親小保左衛門は、このことに感激して親鸞聖人の弟子になり、「唯念」の法名をいただいたということです。



現在のおよしが池付近。石碑とともにいわれが書かれた看板が立つ。

## ②るすが岩 (富士河口湖町)

昔、河口湖の大石村に「おるす」という気だての優しい美しい娘がいました。ある年のこと、大石村に大火事があり、人々は家を建て直すためよその村から大工の応援を頼むことになりました。その大工の中に湖の対岸の小海というところの幸右衛門という働き者でたくましい若者がいて、毎日お茶などの世話をしていたおるすは心を惹かれるようになり、幸右衛門もまたおるすのことが好きになりました。仕事の済んだ大工たちは自分の村に帰っていき、幸右衛門とおるすは気持ちを打ち明けることもなく別れることになりました。しかし、別れると恋しさが募り、幸右衛門は悩み、おるすもまた恋しい人のことを思うようになりました。ある日のこと、幸右衛門は決心し、たらいを舟にしておるすのいる岸辺をめざし漕ぎ出しました。おるすは岸辺にあった枯れ枝を集め、岩の上でこれを燃やして目印にしました。焚き火を頼りに岸にたどり着いた幸右衛門はおるすに再会しました。それからは雨の夜も嵐の夜も、二人はこうして逢うことを楽しみにしていましたが、ある夜のこと、風が荒れ狂い、幸右衛門の乗ったたらい舟は高波に吞まれ、湖の底に引き込まれていきました。知らぬおるすはこの夜も次の夜も幸右衛門を待ち、焚き火を続けましたが、そのうちに悲しみのあまり湖に身を投げてしまいました。今でもこの岩は「るすが岩」と呼ばれ、地元の人たちはこの悲しい物語を伝えています。



るすが岩から河口湖、富士山のぞむ

## ⑤富士の噴火

昔のこと、今でこそ富士は美しい山ですが、こうなるまでに何度も噴火して、それは恐ろしい山だったそう。盛り上がった熔岩を突き破って真っ赤な熔岩がまたわき出すとき、地鳴りはする、火山灰で空は暗くなる、この世も終わりかと思ったそうです。あるときも噴火がはじまり、大目村(上野原市)の者たちは目をでっかく開けて驚いたそう。それからそこは大目村と呼ばれるようになったと言われています。また賑岡村(大月市)の者たちは、ああだこうだと賑やかに騒いだということです。大嵐村(富士河口湖町)では「嵐が来たぞー」噴火の音と嵐の音とを間違えるあわてぶり。ところが、明見村(富士吉田市)の者だけは「いやなことは明日見よう」と言ってお寝してしまっただけで、起きなかったため、ひと晩で土地の形がすっかり変わり、とうとうこの村では富士山が見られなくなってしまったそうです。

## ③おなん淵のお膳 (都留市)

鹿留川に「おなん淵」が静かに水をたたえています。その昔この近くの長者の家に「おなん」というやさしい娘が奉公していました。おなんは働き者で、主人も目をかけていました。ある日のこと、おなんは主人が大切にしていたお膳をこぼしてしまいました。日ごろやさしかった主人の叱り方が激しかったので、おなんは悲しくなり、その日の夕方家を出てしまいました。主人は、あたりが暗くなるのにおなんの姿が見当たりません。一時はひどく怒ったものの心配になり、おなんの名を呼びながら必死で探しました。けれども見つけれられません。翌朝、淵の岩場の上に、おなんの草履が揃えてあるのが見つかりました。おなんの亡骸は水底に沈んだままで、浮かんできませんでした。その後、村に人寄せのときがあるときなどに、前日に「お膳を十膳お貸しください」と紙に書いて淵に浮かべておくと、翌朝にはお膳が行儀良く浮かぶようになりました。ところがある時、借りたお膳を五膳だけ返さなかったで、それからは貸してくれなくなってしまいました。この伝説のお膳は地元の宝鏡寺に保管されているそうです。



おなん淵。自治会等による美化活動が行われている。

## ④鶴になった徐福 (富士吉田市)

秦の始皇帝は「不老不死の妙薬を探してこい」と家臣に命令しました。ある日、日本国にその薬があることを告げる者があって、皇帝はその役目を徐福に命じました。徐福は船出しようやく富士山のふもとにたどり着きました。「ここならどんな薬でも手に入るにちがいない」とよこごび、薬を探し始めました。村人にたずねると、この山腹に育つコケモモ(はまなし)こそ不老長寿の妙薬であると教えられ、ありったけのコケモモを集めました。ところがそのとき、皇帝の死を伝える使者がやってきたのです。徐福たちは途方に暮れましたが、いっその地にとどまろうと決心し、村々を回っては文字を教え、織物や土木の技術を広めたりしました。時が流れ徐福もすっかり年老いてしまいました。「鶴になりたい。鶴ならば千年も生きられる。鶴になって村人の幸せを祈りたい」ある日徐福は、真っ白な着物と、白く長い髪の毛を風になびかせ、富士山に向かって立ち、両手を広げました。徐福のからだがかたくなり、ふんわりと宙に浮いたかと思うと、青い空の中へ吸い込まれるように見えなくなりました。鶴になった徐福は、それからはすそ野の村々に飛んできては、美しい姿を見せてくれるのでした。



現在の福源寺付近

以来この地方は「鶴の郡(こおり)」と呼ばれるようになったと言われ、また、この鶴が死んだとき、それを悲しむ村人たちが富士吉田市にある福源寺という古いお寺に「鶴塚」を建てて、ねんごろまつたということです。



### ⑥でいらぼっち (相模原市)

おおむかし、でいらぼっちという大男が、富士山を藤づるで背中に縛りつけて、西の方から歩いてきました。富士山は重くのども渴いたので、富士山を下ろして大山の上に尻をすえると、大山の上は平べったくなってしまいました。手をのぼして、相模川の水をすくって飲んだら、川はみるみる干上がってしまいました。でいらぼっちは、もっと東へ行こうとして富士山に手をかけたがびくともせず、富士山を縛った藤づるを力まかせに引っぱったら、切れてしまいました。そこで代わりの藤づるはないかと、ふんどしを引きずりながら相模野中を探したが見つかりませんでした。かんしゃくをおこしたでいらぼっちは、じんだらじんだら足をばたつかせて「藤づるはここに生えるな」とわめいてどこかへ行ってしまう。それからずっと、富士山は今の場所にあるし、相模野には藤づるは生えませんが、じんだらじんだらやったあとは、鹿沼と菖蒲沼の二つの大きな沼になり、じんだら沼と呼ばれました。ふんどしを引きずったためにできたほ地には、ふんどし窪と名がつきました。



現在のでいらぼっち伝承地

### ⑦白龍伝説 (厚木市)

飯山観音の裏、標高284メートルの白山のその頂上に1メートル四方の小さな池がありました。この池は白山池といい、不思議なことに、どんな干ばつにも枯れませんでした。あるとき、日照り続きに困り果てた農民たちは、小鮎川で雨乞いの行事をした後、白山山頂に登り、頂上の白山池の水を空にしてしまいました。するとやがて空一面に雲がでて、三日三晩雨が降り続きました。水飲み場を失った白龍が舞を舞い、相模平野に三日三晩の雨を降らせたのです。そうして、農民たちに豊年満作をもたらせたと伝えられています。



現在の白山池



伝説にちなみ、地域の祭りでは白龍の舞が披露される。

### ⑧尼の泣き水 (海老名市)

相模国に国分寺が作られたころ、国分尼寺の尼と国分寺の下を流れる相模川であみを売って暮らしている若い漁師が恋におちました。しかし、漁師が日々やつれていく様子を見て、尼が聞いただと、国分寺に太陽の光が当たりその照り返しが強くさすため川の魚が捕れなくなったことを知りました。数日後国分寺は燃え、尼は放火の罪で刑になりました。尼が葬ら



尼の泣き水の石像

れた台地からは、涙のようなわき水が落ちるようになり、これを尼さんが罪をわびて流している涙だといって、尼の泣き水とよんだそうです。

### ⑨かっぱどっくり (茅ヶ崎市)

昔、間門川に住むかっぱが、村の子どもを川へ引きずり込む悪さをして、村人を困らせていました。そんなある日、西久保の五郎左右衛門が、間門川で馬を洗っていると、かっぱが馬のしっぽにしがみつくと悪さをしたので、村人たちでかっぱを縛りました。しかし、謝るかっぱの姿を見て、五郎左右衛門は縄をとりあげました。すると、後日かっぱがお礼として酒がいくらでも出てくるかっぱどっくりを贈ってくれました。五郎左衛門



輪光寺所有のかっぱどっくり

はその酒を楽しみに働いていたが、ある日村のんべいがとっくりの酒をすべて飲み干し、とっくりのしりを3回たたいてしまったため、酒のでないとっくりになってしまいました。そののち、大山街道べりの小屋にかざられて見せ物になったそうです。

### ⑩須賀の亀 (平塚市)

昔、須賀湊の亀という女の子がはやり病で亡くなったので、両親があ



須賀の亀の石碑

出典・参考文献

- ①③ふるさと山梨の民話 (山梨県連合婦人会)
- ②④甲斐路ふるさとの民話と民謡 (山梨日日新聞社)
- ⑤山梨のむかし話 (山梨国語教育研究会)
- ⑥⑧⑨かながわのむかしばなし五〇選 (神奈川県教育庁文化財保護課)
- ⑦厚木市飯山温泉郷 飯山観光協会ホームページ 参照  
<http://atsugi-iiyama.hp.infoseek.co.jp/pages/hakuryu.htm>
- 厚木市教育研究所ホームページ 参照  
[http://www2.edu.city.atsugi.kanagawa.jp/dr\\_atsugi/tikuban/koayu/change01\\_05.html](http://www2.edu.city.atsugi.kanagawa.jp/dr_atsugi/tikuban/koayu/change01_05.html)

# カワウの言い分

代弁人 天内康夫／環境カウンセラー

「放流したアユを、カワウが集団で根こそぎ食べてしまう。ケシカラン」と、釣り人や漁協の方々は主張しますが、私たちカワウの言い分も聞いてください。

私たちは人間が誕生するよりもずっと前から、先祖代々、川や湖を棲みかに、魚やエビなどを食べて生きてきました。人間と一緒に川や湖沼で暮らすようになってからも、皆さん方とは仲よくやってきたつもりです。

私たちが魚を食べているのを見て、漁師の皆さんは釣り竿や網を入れていました。私たちは人間のお役には立っても、悪さは何一つしていませんでした。いや、子育ての鳴き声がうるさい、糞を落とす…などといわれても、私たちはもともと、人間のいない所を選んで営巣していたのです。ねぐらの近くまでどんどんやってきたのは、あなた方のほうではありませんか。

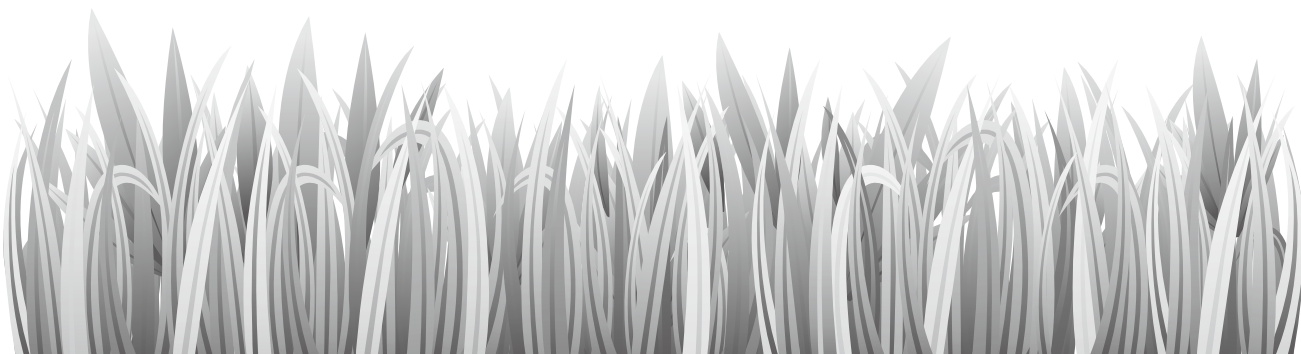
川に堰やダムをつくって魚が遡上・降河できないようにして、川を護岸で固めて、水生生物を棲めなくしたのは誰ですか。魚やエビの数を減らしたのは、捕って食べた私たちでしょうか。数の上では天然アユの

方が放流アユよりも圧倒的に多いと思いますから、ご迷惑をかけないように天然アユだけを選んで食べたいのですが、魚に天然アユ、放流アユの標識が付いているわけではなく、困っています。

それに、私たちは何も、アユだけを選んで食べているわけではありません。フナでも、コイの子どもでも、私たちは季節に応じて、口に入るものを何でも、ありがたく頂いています。多大なお手数をかけ、生態系破壊のリスクを負ってまで移入アユを放流していただかなくても、天然アユがたくさん増えるような川の環境を、どうか早く復活させてください。お願いします。



(写真：山梨県水産技術センター提供)







# 「ECO」と「片付け」と 「捨てられない症候群」

あらいそECOクラブ 鈴木千春

私は夫・子供二人と4人で一軒家に住んでいる。広くはないが、結婚当初住んでいた2DKのアパートに比べたら広くなったはずなので、収納力はバツグン！と思っていた。

引越し当初、私は妊婦で子供はまだいなかった。子供が産まれたら、さぁ大変！

ベビーベッドに紙おむつに布オムツにおしりふき。沐浴用ベビーバスと調乳セット。なんだかかさばるものばかり。。。そして子供が大きくなるにつれ、おもちゃがちらばり、ご飯の食べこぼしはあり、洗濯物の山。。。。

主人が仕事から帰ってきて「なんだこの部屋は！」と言う。仕事でへとへとになって帰ってきてこの部屋をみると、爆発するらしい。確かに言いたくもなるであろう。

私だって、好きでこんな部屋にしているわけじゃ。。。といいわけしても、年々ひどくなっている気もする。(開き直ってる?)

そんな私も、誰か来ることになると部屋を片付けるモードになる。完璧に出来たことはないのだが、努力はする。部屋がきれいだと主人も帰ってくるなり「誰か来たの?」と聞く。

あとゴキブリを発見した後は、アルコール消毒したり片付けたりでキッチンがものすごくきれいになる。子供が喘息持ちなので、絨毯も布団も畳も掃除機は念入りにかける。

やれば出来るじゃ〜ん♪

でも他にもやりたいことがいっぱいあって、片付けはいつも後回しで、結局夜は子供と寝てしまう。

よくECOクラブの仲間と収納や片付けの悩み

をぐちっていたが、最近私は「捨てられない症候群」なのかなと思い始めた。(何故今まで認識していなかったのだろうか?)

雑誌で収納の特集があると読んだり、友達に本を借りたりして「分類ができていない」ことも認識したが、「これをゴミにして捨てると、きっとゴミ焼却場で燃やされてCO<sub>2</sub>が排出されるから、ECOでないから捨てられない!」という罪悪感から捨てられないのだというジレンマもあることを認識し始めた。

では、どうしたらよいのだろうか。。。わかった!買わなければいいんだ!それこそECOだよ〜♪

と試してみたりしたが、本当に必要なものまで買わない時期があり、それも困りものだった。(財布を忘れて買えなかったりも。。。トホホ。)

とりあえず、先日少し頑張って洋服で飽きたもの・汚れて人にはあげられなさそうな子供服は資源ゴミに捨ててみた。後は分別してゴミを出す。。。他にできることは。。。。

普通に考えるとまだまだ無駄なものはたくさんある。でも、物が多いって幸せなこともあるのかなぁと思った。ひとつずつはその時大切だったものや思い出のあるもので、捨ててもよいけど自分や家族に不都合が出てきたら、その時に家族と一緒に処分の方法を考えるのも、子供の教育としても一つの方法かなと思う。あからさまに子供の前で、学校で前にやった宿題のプリントを捨てるのも、忍びないしねえ。

こんなわけで、全然片付ける気がないじゃない〜と言われそうだが、もし万が一、うちが片付いたあかつきにはまた投稿してみようかな♪

トラウトフィッシングの名川を釣り人の手できれいにしたい!

# 釣り人、漁協、行政が一体となって行った「4.19 桂川クリーン大作戦」

中野正貴／トラウトフィッシング専門誌『Gijie』編集長

釣りという遊びの中に、溪流釣りと呼ばれるジャンルがあります。その舞台は主に、谷間を流れる渓流域から、途中いくつもの溪流を束ねながら山里や市街地を流れ下る清流域にまで至ります。そんな清らかで美しい流れの中に棲むのが「トラウト」と総称されるヤマメ、イワナ、ニジマスなどで、それらを対象とした溪流釣りの中でもとくにルアー・フライといった擬似餌釣りをトラウトフィッシングと呼びます。

さて、そんなトラウトフィッシングの世界で、とりわけ関東周辺の多くの釣り人にとって桂川は特別な存在といえます。

桂川は実に多彩な釣り場です。上流の忍野地区を流れる美しいチョークストリームは全国的にも有名なフライフィッシングの人



桂川のヤマメ

気スポットであり、富士吉田市、西桂町、都留市、大月市にかけての中・下流域は大型のイワナやヤマメ、さらにスーパーレインボーと呼ばれる巨大ニジマスの実績も高く、「関東屈指のスーパートラウトの川」と称されるほどです。

このように桂川を魅力的な釣り場にしている大きな要因は、何といても富士山麓から湧き出る豊富な水でしょうか。それらを水源とする流れが水域に年間を通して安定した水温・水量を供給し、トラウトをはじめとする水生生物の育成を促していると考えられるからです。

また、釣り人にとっては魚影の濃さも大きな魅力です。流域には管轄する忍草・都留・桂川の各漁協によってトラウトなどの放流が盛んに行われています。それは、超がつくほど巨大なスーパーレインボーから、手軽に釣れる中型の成魚、さらに稚魚から川で育った美しい野生魚までと様々。釣りの初心者から大物・美形魚狙いまで、釣り人の幅広いニーズに応えてくれるところなども、桂川が関東トラウトの名門河川として支持されてきた所以かもしれません。

ところが一方で、魚影の濃さと併せて必ず話題になるのが「ゴミの多さ」でした。「魚は釣れる、だけどゴミも多くて……」—残念ながら桂川を訪れた多くの釣り人の率直な印象のようで、「ゴミの多さ」ゆえの“特別な存在”という皮肉な側面もありました。

そんな中、ひとりの桂川ファンが「釣り人の手で桂川のゴミを何とかできないか」と声を上げました。昨秋のことで、小誌『Gijie』を通してそのメッセージを伝えると、すぐに多くの方々が賛同して下さいました。そして地元から、都留漁協、桂川・相模川流域協議会、山梨県漁連の各関係者によるご協力を得た後、小誌を含めた4者によって協議を行うこと数回。ついに翌年4月19日、「桂川クリーン大作戦」と題した河川清掃イベントの開催に至りました。



清掃風景 (桂川宮下橋上流)



こんなにたくさんの方がきてくれました

一般の釣り人を含む120名の参加者が集めた当日。桂川本流の約1キロ区間を午前中の2時間ほどかけて清掃し、4トンものゴミを回収することができました。

釣り人、地元漁協、行政、県漁連との連携によって実現した今回のクリーン大作戦。イベントを通して実感したのは、ゴミ問題の難しさはもちろんのこと、それらを解決するために日頃から活動されている漁協や行政・市民団体など地元の方々のご苦労でした。今回我々は、そのほんの一端に触れただけに過ぎません。しかし、自分ひとりの力ではどうにもならなかった問題も、多くの人たちと手を取合うことで解決の道が開けるかもしれない……と、きっと多くの釣り人が勇気づけられたに違いありません。ゴミの少ない、富士山麓の美しい流れ—そんな桂川の原風景を思い描きつつ、これからも釣り人の立場から、この川とかかわっていきたいと思います。

\*「桂川クリーン大作戦」の様子は、Gijie HP (<http://www.gijie.net/>) でご覧いただけます。



平成の名水100選

# 夏狩湧水を使ったわさびづくり

～わさび栽培を通じて感じた環境への意識～

山梨県都留市 菊地富美男

私は、山梨県都留市夏狩でわさび栽培をしている菊地富美男です。

夏狩というところは、富士山の東部にあたり、西桂町と都留市の境で、近くに柄杓流川が流れ、至る所から富士山の湧水が湧き出している、とても素晴らしいところです。

その美しい水を利用し、大正7年から四代にわたり、わさび栽培をしています。

私のわさび栽培の特徴は、昔ながらの自然農法で、原種に近い「真妻」という種類のわさびを無農薬で育てています。

わさびは日本原産のもので、アブラナ化に属し、キャベツ同様「アブラムシ」や「アオムシ」、「クロムシ」などの害虫が発生しやすく、先代の頃は農薬を使っていました。

私の代になり、自然に育つわさびを観察していて、何か農薬に対する違和感を感じ、20年前から無農薬栽培・自然農法に切り換えました。

最初、大変だったことは、自然環境のバランスが悪く、害虫が大発生したことで、特に、土づくりから勉強し直しました。

今では自然治癒力の増し、バランスのよい元気な土になり、甘みが強く香りのよいわさびが取れるようになり、お客様の方からの注文が増えるようになりました。



豊富な湧水を使ったわさび田の様子

自然環境を勉強していくうち、自分のところだけでなく、湧水は川に流れ、やがて海に行き、雲となり、また、雨となって湧き出してしまうように、すべてつながっていることに気付き、近くを流れている柄杓流川のごみを年に3回ほど、わさびの収穫体験やホテルの観賞をして楽しみ

ながらごみ拾いをするという活動をしています。

「こんな素晴らしいところで生活できて幸せだな」とか「ごみが拾えてうれしいな」と思い、感謝しながらごみ拾いをしています。皆さんもご参加いただき、上流と下流の文化交流などができればと思っています。

なお、私は、わさびの粕漬も製造しており、わさびは2年もの「真妻」を、また、神奈川県丹沢山の酒粕を熟成し、塩は岩塩、砂糖は北海道のてんさい糖を使った、こだわりのわさび漬をつくっています。道志村の道の駅などで販売していますから、是非ご賞味ください。

このような機会を与えて下さり、ありがとうございます。感謝いたします。



こだわりのわさび漬

## 【編集委員雑感】

取材に何うと、アオムシがわさびの葉を食べていました。無農薬栽培を始めてから数年は害虫が大発生したとのこと。これに対しクモが巣を張りはじめ、だんだん取まってきた、クモは益虫といったお話を聞きました。自然の流れをつかみ、わさびづくりに生かすという人の知恵。実践している人の話は少し聞いても面白いと感じました。

■菊地さんのわさび漬は、道志村のほか、鳴沢村や富士吉田市の道の駅でも販売されています。

■ご購入等ご関心のある方は次の連絡先まで。

〒402-0035山梨県都留市夏狩1803

山葵農家 菊地富美男

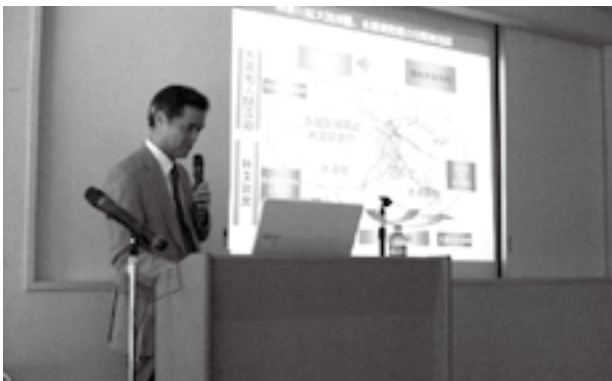
電話0554-43-9279

## 2009年度定期総会を開催しました

2009(平成21)年5月23日(土)13時より、サンエールさがみはら(相模原市)において、2009年度桂川・相模川流域協議会定期総会を開催しました。

総会議事に先立ち、1時間あまりにわたり、横浜国立大学大学院 佐土原聡教授から、「流域圏のプラットフォームのこれまでの成果と流域協議会との協働」についてご講演をいただきました。

流域圏プラットフォームは、水循環、大気環境、自然環境、生活排水処理の状況、土地利用の状況等、多岐にわたる流域内の情報を、空間的、時間的に情報処理を行い、全体の俯瞰や個別の問題の解決に役立てていこうというものであり、これまでの研究成果や今後の当協議会の活動との関連について興味深いお話しがありました。



佐土原先生の講演

講演に続き、各地域協議会の活動内容の発表が1時間程度行われました。

各地協は、上流から下流までの地域課題に応じた、アイデアのある活動を行っています。他地域の会員においてはこれを知る機会がありません。そこで総会において活動内容の発表の機会を設け、ほかの地協ではどんな活動をどのような考えで行っているのかを知ろうというものであり、合わせて地協間の交流を図ろうというものです。

各地協からの発表後には質疑も多く寄せられ、他地域の活動への会員の関心の高さがうかがえました。



地協報告に熱心に聞き入る出席者

総会議事は、まず、市民部会の宮野さんが議長に選出され、総会成立報告が行われました。2008(平成20)年度事業報告(案)及び決算(案)の審議が行われ、監査報告ののち、承認されました。事業報告においては、主要事業(流域シンポジウム・上下流交流事業(河西代表幹事)、田んぼの生きもの調査(大木幹事))について、詳細に報告が行われました。また、2009(平成21)年度事業計画(案)及び予算(案)についても、承認されました。

その他質疑においては、国土交通省京浜河川事務所から、相模川河川整備計画の進捗状況と6月21日に開催される「相模川・中津川ふれあい巡視」について報告がありました。また、協議会事業の評価をしていく必要があるという意見、備品、市民部会員の支出についての要望があり、これらは幹事会、市民部会において協議していくことになりました。また、事業者部会、行政部会の取り組みが総会資料から読み取れないとの意見があり、これに対しては、市民、事業者、行政は網の目のように入り組んで活動しており部会ごとに資料中で活動を表現するのは難しいが、次年度総会資料の作成時から各部会の活動がわかるよう配慮していけばよいのではないかという意見がありました。



# 地域協議会だより 桂川・東部地域協議会

環境活動においては当地協は地域の老舗、活動内容にもそれなりの自負はあるものの、近年では水ばかりか地球温暖化や自然環境保全に関する活動をする団体や環境活動に積極的な学校も増えてきました。これらの団体は若干の考え方、方向性の違いはあるとはいえ、環境を良質なものととの大筋は同じはず、事業内容を見てもクリーンキャンペーン、植樹、森林整備など同様を実施している場合が多いもの。とすれば、小さな組織が細かな事業を単独で実施していくよりは、連携の機会の創出による事業の活性化が重要であり、これが老舗の当地協に求められる役割ではないかと考えるようになりました。

昨年度から今年度前半までの当地協の事業実施例をご紹介します。

## ■クリーンキャンペーン

連携したのは、大月市笹子地区自治会、上野原をきれいにする会、都留市東桂中学校、都留市夏狩地区自治会、都留青年会議所、山梨県漁協及び釣り雑誌ギジーなど広範多岐。これらの団体とともに桂川の本支流において清掃活動を実施しました。



都留市田原の滝は危険箇所のためヘルメット着用、ごみは川から橋にクレーンで引き上げるといった本格的な活動。

いずれも当地協からは、人(会員参加)と物(ごみ袋や軍手の提供)の協力支援を行ったほか、漁協等が初めて実施した清掃活動においては、駐車場の手配や運営方法のノウハウに関する情

報も提供しました。ごみの収集、クレーン提供、駐車場の確保に関しては、地元市町村や事業者会員の東京電力(株)や堀内電気(株)などの当会会員の協力が不可欠でしたが、当地協はこれらの協力関係のつなぎ役としても役割を果たすことができました。

新たに活動に参加した都留青年会議所のメンバーや桂川の釣り人からは「何でこんなにごみが多いのか」といった声が聞かれ、ごみが多いのはいい話ではないのですが、これらの皆さんに「気づき」の機会をつくれたことをうれしく感じました。

## ■森づくり活動

森づくり活動においては、例年開催されている大月森づくり会の植樹体験に参加したほか、緑化推進会議が開催した間伐枝打ち体験及び流域材を使用した木工体験で巣箱やプランターづくりを楽しみました。



緑化推進会議の木工体験には大月森づくり会が参加し、今後「相互乗り入れ」といった展開もあるのではと思わせた。

これらの活動には、地元住民のほか、他の地域から参加した親子なども多く、森づくりの重要性を知るとともに交流を深める機会ともなりました。

今後も、様々な団体との連携、交流により事業の創出、活性化に努め、桂川の保全に大きな役割を果たしていこうと考えています。

# 2009年度流域シンポジウムのお知らせ

今年度の流域シンポジウムは、桂川・相模川の利水地域のうち最大の都市である横浜市において開催します。

当協議会は以前から森づくり専門部会などにおいて、水源林の未来を見据えた流域材の活用方策を検討、支援してきましたが、その成果としてシンポジウムを開催し、流域材の今後を展望します。

テーマは「都会が支える水源林の未来ー流域材の活用ー」。森林の荒廃、林業の活性化を言うにとどまらず、「良質な材なのか」「いくらぐらいかかるのか」「家の建築以外にどんなことができるのか」「どこに頼めばいいのか」といった、流域材に関心はあっても不明なこと、不安なことがある方々に、具体的なイメージなどを提供できるものにしたと考えています。

また、ご参加いただいた方には、流域材活用の事例集を配布予定です。  
当日はどなたでもご参加できます。ぜひお越しください。



## ○日時

2009年11月21日(土) 13時～(12時開場)

## ○場所

神奈川中小企業センター14階多目的ホール

横浜市中区尾上町5-80

(JR関内駅(北口)徒歩5分、市営地下鉄関内駅(7番出口)徒歩2分、

みなとみらい線馬車道駅(3番出口)徒歩7分)

## 第61回全国植樹祭 開催日決定!

**開催日が平成22年5月23日(日)に決定!**



第61回全国植樹祭の一般参加者を募集します。大会当日は、お手植え式典会場には、今回ご応募いただいた方以外は入場できませんので、この機会に是非ご応募ください。

**会場**：南足柄市足柄森林公園丸太の森地区、県立秦野戸川公園地区

**募集人数**：1,500名(応募多数の場合、抽選)

**応募資格**：県内に在住、在勤、在学されている個人(満18歳以上)又は団体(満18歳未満の方が含まれる場合には引率者(成人)の参加が必要、満6歳未満の参加不可)

**募集期間**：平成21年10月10日(土)～11月20日(金)

**応募方法**：指定の申込書により郵送又はFAXで応募してください。インターネットでの応募も可能です。

詳しくは、ホームページをご覧ください。

平成22年に本県で開催する第61回全国植樹祭の開催日が、5月23日(日)に決まりました!大会開催に向けて10月10日(土)にカウントダウンセレモニーを行い、カウントダウンボードの除幕式や白井貴子さん制作の大会テーマソング「森へ行こう」のお披露目を行いました。大会参加者を募集します!

## 【お問い合わせ先】

第61回全国植樹祭神奈川県実行委員会

(神奈川県環境農政部森林課全国植樹祭推進室内)

〒231-8588 横浜市中区日本大通1

TEL:045-210-4375 FAX:045-210-8855

大会HPIは「植樹祭 かながわ」で検索してください。



## 桂川・相模川流域協議会入会のご案内

あなたのその力が豊かな水環境を創ります。

協議会では、さまざまな活動を通じて、水源環境の保全・再生に努めています。

桂川・相模川流域協議会の興味を持った方はぜひ入会してください。

◎個人会員は 年会費 1口 1,000円(1口以上)

◎団体会員は 年会費 2口 2,000円以上

◎事業者会員は年会費 1口10,000円(1口以上)です。

詳しい案内はこちら〈振込先〉

郵便振替：振込口座 00220-5-10259 銀行振込：振込口座 三井住友銀行横浜支店  
名 義 桂川・相模川流域協議会 普通口座 6825559  
名 義 桂川・相模川流域協議会  
代表幹事 河西悦子

## 編集後記

今回の表紙は、写真を全面において構成してみました。また、中央のカラーページには、流域に伝わる伝説を集めて、流域にちりばめてみました。皆様のご意見、ご感想をお寄せください。(M.N)

今回は会員の皆さんから情報をいただき、原稿を作ることができました。多くの方が関わり会報誌を作るといのが本誌の基本的な方向であると再認識。今後も情報提供ほかご協力をお願いします。(K)

表紙写真(田んぼの生きもの調査) 撮影場所：神奈川県相模原市鳩川・縄文の谷戸 撮影者：倉橋満知子



この印刷物は色覚障害の方に配慮し制作しています。

本誌に対するご意見・ご感想を下記事務局までお寄せください。

あじえんだ113 No.23(2009.10.31発行)

発行 桂川・相模川流域協議会  
編集 あじえんだ113編集委員会

桂川・相模川流域協議会ホームページアドレス <http://www.katura-sagami.gr.jp>

事務局 山梨県富士・東部林務環境事務所 〒402-0054 都留市田原三丁目3-3 TEL 0554-45-7811 FAX0554-45-7807  
神奈川県環境農政部大気水質課 〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL 045-210-4127 FAX045-210-8846